

二〇二四年度

恵泉女学園中学校 第三回 入学試験問題

国語（四五分）（全一九ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

|      |
|------|
| 受験番号 |
|      |
| 氏名   |
|      |

一、わたしは父親の会社が倒産し、私立の女子校を辞めて公立中学校に転校しました。優しくしてくれる友人たちはいますが、今ももとの学校に戻りたいと思っています。そんな時図書館で七夕の短冊を書くことになり、わたしはひそかに自分の願いを書きました。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

梢の様子がおかしいことに気づいたのは、期末テストの翌日だった。

その日の梢は、朝の挨拶の返事から、妙に無愛想でよそよそしかった。いつものようにたびたび話しかけてくることもないし、それどころか逆に、わたしのことを避けているようにも感じた。

テストの手応えがよくなって機嫌が悪いのだろうか、とも考えたけど、朋華や高梨さんたちには普通に接している。明らかにわたしひとりに対して怒っている。だけど、梢の機嫌を損ねるようなことをした記憶はまったくなかった。

その後も原因はわからないまま、給食の時間になった。給食の時間はいつも憂鬱だ。ほかのどの時間よりも、清凜にいたところとの違いがありすぎて、どうしても清凜の給食と比較してしまう。おまけにきょうは、となりに座る梢から不機嫌な空気が伝わってきて、いつもより余計に気分が悪かった。

見るからにパサパサしていそうなフライドチキンも、薄く油の浮いた野菜スープも食べる気が起きなくて、わたしがミルクパンだけを不愉快な気分ですべていると、向かいの席の足立くんがもみ手をしながら尋ねてきた。

「あのう、もし食わないんだっただけませんかねえ、そのフライドチキン」

フライドチキンはここでは人気メニューのようだけど、わたしはべつに惜しくもない。だから「どうぞ」と軽くこたえると、足立くんが「マジでえ——っ!？」と大声で叫んだ。

「いいのかよ、フライドチキンだぞフライドチキン！ 食ったあとで返せなんて言われても返せねえぞ!？」

そんなにうるたえるくらいなら、最初からねだらなければいいのに。足立くんの声がうるさくて、わたしが顔をしかめていると、梢が突然とげとげしく言った。

「そんなにこの学校の給食が気に入らないわけ？」

はっとしてとなりを見ると、梢が横目でわたしをにらんでいた。なぜにらまれているのかわからず、わたしは戸惑って言った。

「そういうわけじゃないわ。ただ、なんだか食欲がなくて……」

「無理しなくたっていいよ。お嬢様学校の豪華な給食を食べ慣れてるから、こんな貧乏くさい給食は食べたくないでしょう?」

わたしは A を疑った。どうして梢が、わたしの小学校のことを知ってるの？ 混乱して言葉をなくしていると、朋華が騒ぎだした。

「なになに、美貴ってそんなすごい小学校に通ってたの!? なんで教えてくれないのよ!」

「あつ、もしかしてあれじゃね? 実は夜逃げしてこっちに引っ越してきたから、言いたくなかったとか?」

冗談めかした足立くんの言葉に、びくりと肩が震えた。けれど動揺はそれだけでなんとかおさえこんで、わたしは平然とした態度で言った。

「……引っ越しは、単に親の都合。けど、貧乏くさい給食を食べたくないっていうのはそのとおりだから、食べたければ遠慮しないでどうぞ」

冷やかにそう告げると、<sup>(1)</sup>足立くんは「いや、ああ、悪イ」と面食らったように、わたしが差しだしたフライドチキンの皿を受け取った。

そのあとで、わたしは梢の顔をにらみつけた。すると梢はわたしをにらみかえそうとしかけてから、気まずそうに給食に視線を落とすとした。

「誰に聞いたの」

給食が終わったあと、わたしは空き教室で梢に聞いた。だした。

梢の態度からは、給食のときのふてぶてしさが消えていた。<sup>(2)</sup>大きな体を縮こまらせて、梢はほそほそとこたえた。

「……美貴のおばあちゃんに。美貴のおばあちゃん、うちのおばあちゃんと友達で、たまに話しにくるのよ。春休みに会ったときに、美貴のことを聞いて、いっしょのクラスになったら仲よくしてあげてくれって……」

信じられない。わたしは思わずそうつぶやいていた。親の会社がつぶれて私立の学校に通えなくなったなんてこと、同級生に知られたら、わたしがどんなにみじめな気分になるか、祖母は考えもしなかったのだろうか。

声が震えてしまわないように、わたしは「そう」と無感情に言った。

「つまり、最初からわたしのことを憐れんで、親切にしてくれてたわけね」

「そんなつもりじゃ……」

言いかえそうとした梢の顔を、わたしはきつくにらんだ。そうしてないと、くやしくて涙がこぼれそうだった。対等とと思っていた相手から、ひそかにずっと憐れみを受けていた。そのことはわたしにとって、耐えられないほどの屈辱だった。

「それで、どうしていまさらわたしの事情をばらしたりしたの。朝からわたしに怒ってたみただけど、わたし、なにか気にさわることもしました？」

「それは、美貴があんなこと書くから……」

わたしは「あんなこと？」と **B** をひそめた。すると梢は責めるような瞳でわたしを見つめてこたえた。

「……公民館の、七夕飾りの短冊。清凜に帰りたいって、あれ美貴が書いたんでしょ」

ああ、とため息まじりの声もれた。勉強会が解散したあと、わたしはこっそり公民館にもどって、短冊に願いを書いていた。意味がないことはわかっているけど、書かずにはいられなかったのだ。誰にもわかりはしないだろう、と高をくくっていたのが間違い

だった。

まあ、もうどうだっていいけど。そんなふうには投げやりな気分では考えていたら、梢がうつむいて続けた。

「あの短冊を見つけたとき、すごく悲しかった。あたしはもうすっかり美貴と友達のつもりだったのに、美貴はずっともとの学校に帰りたかったんだって。あたしたちのことなんて、なんとも思っただけでなかったんだって。それでいらいらして、あんな……」

そう話す梢は本気で傷ついているようで、わたしは動揺してしまった。顔を上げた梢の目には涙のつぶが浮かんでいて、それを  
見たわたしはとっさに、梢に背を向けていた。

「もういいわ、じゃあ」

わたしは足早に教室を出た。廊下で聞き耳を立てていた朋華のことも無視した。

しばらくしても梢が追いかけてこないものでほっとした。鼻の奥がさつきからずっと熱かったけど、意地でも泣いてやるものかと決めた。

(中略)

次の日から、わたしはひとりになった。教室でも部活でも、誰ともつきあわなくなった。ときどき梢が話しかけようとしてくるのがわかったけど、わたしは頑なに気づかないふりをした。

朋華も高梨さんも沢村さんも、わたしに関わってはこなかった。関わりあいを拒絶する空気を、わたしが発していたせいかもしれ

ないけど、もともと彼女たちは梢の友達だ。梢と仲違いをしたわたしと仲よくする理由はない。

せいせいした。そんなふう**に**強気でいられたのは、最初のうちだけだった。

清凜女子学院に通っていたころは、友達がたくさんいた。こっちに來てからも、梢がすぐに仲間の輪に入れてくれた。自ら望んでひとりになってはじめて、わたしはひとりであることの寂しさを知った。

ひとりぼっちのまま数日が過ぎて、七夕の日になった。公立の中学でも、七夕の給食には七夕ゼリーが出るものらしい。それは紙製のカップに入った白いゼリーで、トッピングに星型の小さなゼリーが二個、申し訳程度に載っていた。

「……安っぽい」

わたしは誰にも聞こえない声でつぶやいた。それから、去年までの七夕ゼリーは、と思いだそうとして、もういいかげん嫌になっ  
た。

どんなに強く願ったところで、どうせもうわたしは、清凜にはもどれない。だからこうやっていちいちあのころといまをくらべるのは、ただ無意味につらくなるだけだ。

わたしはため息をついて、食パンに塗るイチゴジャムの小袋を開けようとした。するとそのとき、梢が「ねえ」とわたしに声をかけた。

話をする気はなかったのに、反射的にそちらを向いてしまうと、梢は遠慮がちに言った。わたしの七夕ゼリーを指差して。

「それ、くれない？」

わたしは啞然として梢の顔を見つめた。梢は上目遣いにわたしの返事を待っていた。

驚きとあきれがいらだちに変わり、けれど嫌だと返事をするのも癪で、わたしはゼリーのカップを乱暴に梢の給食のトレイに置いた。ありがと、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した。

まったく、あきれでもものも言えないとはこのことだ。いくら食い意地が張っているといったって、よりにもよってわたしの給食をほしがるなんて。

胸の中で軽蔑の言葉をならべながら、イチゴジャムの袋を千切ると、いきおいよく飛びだしたジャムがトレイを汚して、頭がカッと熱くなった。けれど怒りはすぐに冷えてしぼまり、同時にわたしの心も暗く落ちこんだ。

……どうして、あんなつつけんどんにわたしたりしてしまったんだろう。気づけばわたしはそう後悔していた。しょうがないな、と苦笑いでも浮かべて手渡していれば、それをきっかけに梢と仲なおりできたかもしれないのに、と。

強がってごまかすことはもうできなかった。梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった。

たしかに梢はわたしが隠していたことをばらした。だけど、もともと悪いのはわたしだ。最初の理由がなんだったって、梢はずっとわたしにやさしくしてくれた。わたしをひとりにしなideくれた。なのになわたしはつまらない意地を張って見栄を張って、梢のことを



傷つけて……。

そんなことはもうとつくにわかっていたのに、それでもまだ梢のことを避け続けている自分に、心底嫌気が差した。給食に手もつ  
けず、机の下でぎゅっと両手を握りしめていると、<sup>(4)</sup>騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた。

自分が泣きそうになっているのがわかった。けれど涙があふれる寸前で、「美貴」とわたしの名前を呼ぶ梢の声が耳に届いた。梢のほうを向いたときには、無意識にまた不機嫌な表情になってしまっていて、わたしは心の中で自分をなじった。だけどわたしの不機嫌顔は、梢の持った皿を見た瞬間、驚きで塗りつぶされていた。

その皿のまんなかには、カップから丁寧に取りだされた七夕ゼリーが載っていた。しかもゼリーのまわりは、たくさんの星型のトッピングで飾られ、皿にはイチゴジャムでお洒落な模様が描いてあった。

その模様とトッピングのデザインには見おぼえがあった。勉強会のときに見た、高級スイーツの写真とそっくりだったのだ。

「うおっ、なんだその豪華ゼリー！」

足立くんが驚きの声をあげた。すると朋華が横から、「すごいでしょ、梢シェフのスペシャル七夕ゼリーよお」と自慢する。

「美貴、これ、美貴に……」

梢がおおおとゼリーの皿を差しだしてきた。

「えっ、なんでわたしに……」

「その、この前のお詫<sup>わ</sup>びについていうか……美貴、すごく怒ってるだろうから、どうしたら許してもらえるか、みんなに相談したんだ。そしたら朋華がアイデアを出してくれて……」

梢が横目でとなりの朋華を見た。わたしもつられて朋華に視線を移すと、朋華はしたり顔で言った。

「ほら、お金で買ったものをあげるのもなんか違うでしょ、この場合。それでいろいろ考えたんだけど、このあいだ美貴があの高級スイーツの写真をすごく熱心に見てたから、こういうのなら喜んでくれるんじゃないかなあ、って思って」

わたしは言葉を失ったまま、再び梢の顔を見た。梢は目を伏<sup>ふ</sup>せて、わたしに謝ってきた。

「この前は、ごめん。美貴がつらいのはわかったのに、勝手にいらついで、美貴が秘密にしておきたいことをばらしたりして……」  
「違う、梢はなにも悪くない。なにお詫<sup>わ</sup>びなんてもらえないわ」

わたしはとっさにそう言っていた。けれど梢は、「いいから、あたしが美貴にあげたいの。だから、はい」と、ゼリーの皿を差しだしてくる。

わたしはためらいがちにその皿を受け取った。ゼリーを飾る星型のトッピングは、全部で十個あった。トッピングはひとつのゼリーに二個。梢と朋華のゼリーからは、トッピングがなくなっていた。さらにとなりの班に目をやると、高梨さんが恥<sup>は</sup>ずかしそうにほほえみ、沢村さんがいつもの無表情のまま親指を立ててみせた。それを見たわたしは、もう涙をこらえきれなくなってしまった。

「どうよ美貴、こんなデザート、さすがに前の学校でも出なかったんじゃないの？」朋華のおどけた科<sup>せり</sup>白<sup>ふ</sup>に、わたしはうん、とうな

ずいた。当たり前だ。<sup>(5)</sup> こんな特別なメニュー、どんな学校の給食だって、食べられるわけがない。

「ありがとう……それに、ごめんなさい」

ずっと言えなかったその言葉が、自然とわたしの口からこぼれた。にじんだ視界で梢の顔を見つめると、梢はほっとしたような笑みを浮かべていた。

足立くんがわざとらしく聞いてきた。

「いやあ、すっげえなあ、それ。おれのと交換しねえ？」

「……だめ、これは絶対あげない」

涙まじりの笑顔でこたえると、わたしはゼリーをスプーンですくい、イチゴジャムのソースをつけて口に運んだ。

甘酸っぱい味と、ひんやりした食感が口の中に広がる。その味と食感を大切に味わってから、わたしは「おいしい」とつぶやいた。この学校に来てから、給食をおいしいと感じたのはこれがはじめてだった。

(如月かずさ『飛ぶ教室の本 給食アンサンブル』より)



問五 騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた<sup>(4)</sup> とありますが、このときの美貴の気持ちの説明としてふさわしいも

のを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分に話しかけてくれない梢たちの様子から、もう仲直りできないのだとあきらめる気持ち。

イ 自分が意地を張っているせいで梢たちと仲直りできず、そんな自分が嫌になっている気持ち。

ウ 今さら清凜には戻れないが、今の学校にも自分の居場所がないことが分かり、苦しい気持ち。

エ 短冊を書いたことで梢たちの信頼<sup>しんらい</sup>を失ってしまい、浅はかな自分の行動を後悔している気持ち。

オ 梢たちとの距離<sup>きょり</sup>がますます開き自分だけが取り残されていることを感じて、悲しい気持ち。

問六 こんな特別なメニュー、どんな学校の給食だって、食べられるわけがない<sup>(5)</sup> とありますが、このときの美貴の気持ちを説明し

なさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

言葉を書く、言葉で表すということを仕事にしている、いつもつよく意識することは、実際には、言葉にできない、言葉で表せないという思いや事柄が、どんなにたくさんあるかということです。

言葉を書く、言葉で表すということは、言葉にしたこと、できたことを明らかにすることであると同時に、言葉にできない、言葉で表せないことを明らかにすることでもあります。

不文律という言葉があります。これは、なかなか言葉にできないような、めったに言葉で表せないような、しかし、おたがいのあいだで重んじたいルール、価値があるんだということを言う言葉です。

英語だと、コモンローという言葉が、そしてコモンセンスという言葉が、不文律という言葉にあたりますが、それともすればコモンローは慣習法だ、コモンセンスは常識だと片づけられてしまいがちで、そういった言葉が社会にゆつくりと育んできた「共通の」感覚、「共有する」価値、「共にする」言葉、眼差しまなざしを「共にする」方向といった、もともとの意味が、いまではすっかりないがしろにされていると言つていいかもしれません。不文律という言葉も、いまは身近な言葉ではなくなっています。

けれども、そのために、わたしたちの社会に失われ、落ちてきてしまったものがあります。筋肉が落ちてしまった。社会の、筋肉が落ちてしまった。使わないと、落ちてしまうのが筋肉です。その社会のしなやかな筋肉をつくり、不断にたもつのが、わたしの

(1)

考えでは、不文律です。

不文律を重んじることの大切さが軽んじられて、不文律のもつ力が損なわれると、損なわれるのは、コモンという、社会の健康と  
 いうか、活力を支える、「共にある」意識です。

社会を、新鮮な空気のかような場所にしてゆく。そのためになくはならないものとしての、不文律のもつ力ということ、いまさ  
 らのように思いださせるのが、幕末から明治へ、日本の近代への舵を I 勝海舟の遺した言葉です。

『氷川清話』として遺されている勝海舟の談話は（講談社学術文庫ほか）、言葉の切れ味のあざやかさ、するどさで知られますが、  
 その言葉の切れ味を生んだのは、勝海舟という人が終生失うことのなかった、どこまでも社会の不文律を重んじることが第一とした  
 心根です。

『氷川清話』の言葉遣いは独特です。「維新の頃には、（……）広い天下におれに賛成するものは一人もなかったけれども（……）お  
 れは常に世の中には道というものがあると思って、楽しんで居た」。海舟の言う「道」が不文律です。しかし、「主義といい、道と  
 いうて、必ずこれのみと断定するのは、おれは昔から好まない」と言い、「単に道といっても、道には大小厚薄濃淡の差がある。し  
 かるにその一を掲げて他を排斥するのは、おれの取らないところだ」と言いました。

海舟は幕府の政権奉還、江戸城の無血引き払いを実現した人ですが、そのとき海舟は、「都府というものは、天下の共有物であつ  
 て、決して一個の私有物ではない」ことを論拠とした。「II」というの是不文律の基準です。気運を読んで、社会を律す

る不文律に拠<sup>よ</sup>って生きる生き方が、海舟という人物の自信をつくった。人間は活物<sup>かぶつ</sup>だ、というのが、海舟の物差しでした。

「なに事も根氣<sup>もと</sup>が本だ。今の人は牛肉だとか、滋養品<sup>じよう</sup>だとか騒<sup>さわ</sup>ぐ癖<sup>くせ</sup>に、根氣はかえって弱<sup>みよ</sup>いが妙<sup>みょう</sup>だ」。あるいは、「寝学問<sup>ねがくもん</sup>」が大切だと言<sup>い</sup>い、「まず横に寝て」、そして呼吸をととのえて、あくまで「不用意の用意」をもつてしなければ、<sup>(2)</sup> 事に応じ変に処して、やり通すなんてできないのだ、と言<sup>い</sup>いました。

「世の中の事は、時々刻々返遷<sup>きわ</sup>極まりないので、機来<sup>きた</sup>り機去<sup>き</sup>り、その間実に髪<sup>はつ</sup>を容<sup>い</sup>れない。

こういう世界に処して、万事小理屈<sup>こりくつ</sup>をもつて、これに応じようとしても、それはとても及<sup>およ</sup>ばない。世間は活<sup>い</sup>きて居る。理屈は死んで居る」。何より大事なのは、「この間の消息<sup>せうし</sup>を看破<sup>かんぱ</sup>するだけの眼識<sup>がんし</sup>」であり、「この間に処していわゆる気合を制するだけの胆識<sup>たんし</sup>」だと言<sup>い</sup>い切<sup>き</sup>っています。

しかし、<sup>(3)</sup> 「根氣」といい「気合」といい、また「眼識」といい「胆識」といい、どれも数値にはでない、厳密に決められない、しごく曖昧<sup>あいまい</sup>な言葉でしかありません。数値にきちんと表せないような物言<sup>ものごと</sup>いが信じられなくなった今日、いずれもいまは使われなくなった言葉です。けれども、そういった数値にはでない、厳密に決められない、定義できない、むしろ曖昧な言葉によってしか伝えられないような大切なものが、社会にはあつて、そうした不確かな言葉を通じて、確かに伝えられ、手わたされてきたのが、おたがいのあいだで分け合<sup>あ</sup>える、「共通の」感<sup>かん</sup>覚、「共有する」価<sup>か</sup>値、「共にする」言<sup>ごん</sup>葉、眼差<sup>がんさ</sup>しを「共にする」方<sup>かた</sup>向<sup>む</sup>きといった、不文律を重<sup>おも</sup>んじることの大切<sup>たいせつ</sup>さだった、ということを考えます。

(注) 消息：様子。事情。



(注) なまかな言葉では表せないけれども、おたがいのあいだで重んじたいルール、価値があるんだということ。ルールというと、すぐに規則、法律とされますが、法律は法律が全部なのではなく、法律の半分はコモンロー、不文律でできています。(4) 亡くなった司馬遼太郎さんは「義」と書いて、「義」にルールと振り仮名をふって、書いたことがあります。そうした「義」もまた、法律の条文にあるルールではなく、不文律の言葉でしか表せないルールです。

(5) ゆたかな不文律を育てられない社会は、画一的になっていって、いつか息ぐるしくなってゆきます。不文律を重んじることを重んじること。不文律を重んじるといことが、実は、どれほど社会の言葉をゆたかにしてきたか、どれほどわたしたちの生き方や態度を充実させてくることができたか、そうして、コモンという、社会の健康というか、活力を支える、「共にある」意識、感覚を、どれほど育ててこられたのか、ということ、いまは、あらためて省みるべきときではないだろうかと思うのです。

(長田弘『なつかしい時間』より)

(注) なまかな…生半可なまはんかな。

(注) 司馬遼太郎…歴史小説家。

問一 社会の、筋肉が落ちてしまったとありますが、どういうことですか。説明しなさい。<sup>(1)</sup>

問二 I にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 漕いだ      イ 作った      ウ 進めた      エ 切った

問三 II にあてはまる最も適切な語句を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 政権奉還      イ 無血引き払い      ウ 天下の共有物      エ 一個人の私有物

問四 事に応じ変に処して<sup>(2)</sup> について、この意味を表す四字熟語を書きなさい。

問五 「根気」といい「気合」といい、また「眼識」といい「胆識」といい、どれも数値にはでない、厳密に決められない、しごく曖昧な言葉とありますが、これらの「しごく曖昧な言葉」と同じ語を次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心根      イ 独特      ウ 道      エ 断定      オ 排斥

問六 亡くなった司馬遼太郎さんは「義」と書いて、「義」にルールと振り仮名をふって、書いたことがあります とありますが、<sup>(4)</sup>

ここからうかがえる司馬遼太郎の考え方として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人は必ずしも法律の条文にだけ従って行動すべきものではなく、正義や恩義などを第一に行動することがあってよい、という考え方。

イ 法律というルールは、正義や恩義のような道徳に比べれば取るに足りない価値しかないので重視すべきではない、という考え方。

ウ 正義や恩義という社会のルールにしばられることなく個人として自由に判断し、のびのびと生きていくのが人間らしい、という考え方。

エ 法律の条文にあるルールと正義や恩義のような不文律のバランスを常に保ち、世界平和の実現を目指していくことが人類の責任だ、という考え方。

問七 <sup>(5)</sup> ゆたかな不文律を育てられない社会は、画一的になっていって、いつか息ぐるしくなってゆきます とありますが、なぜ「息

ぐるしくなってゆく」のですか。三〇字以内で説明しなさい。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ①戦争はゲキカの一途<sup>いっど</sup>をたどる。
- ②コイに失敗をする。
- ③キシユク先は東京に決まった。
- ④大会新記録をジュリツする。
- ⑤委員会の規則をサツシンする。